

会話の公準違反と欺瞞性認知の程度¹⁾

盛 崎 俊 浩²⁾
木 藤 恒 夫³⁾

要 約

グライス (1998) は会話の参加者が守るべきルールとして質・量・関係・様式の4つの会話の公準を提案している。会話の公準を破る発言内容は欺瞞性認知を引き起こすとされる (McCornack, 1992)。本研究では、村井 (1998) において検討のなされていない関係の公準違反による欺瞞性の認知、および関係の公準を含む複数の公準の違反による欺瞞性の認知を検討した。場面を描写した文を呈示し、それに続く応答文に対して欺瞞度を1から7の7段階で評定する課題が実施された。その結果、公準違反なしおよび質の公準違反に比べて関係の公準違反の欺瞞度が高かった。また、単一の公準違反より複数の公準違反の欺瞞度が高かった。これらの結果から、関係の公準違反によって欺瞞性認知が起こること、公準違反の種類によって欺瞞性認知の度合いが異なること、公準違反が複数組み合わせると欺瞞性認知の度合いに影響することが示唆された。

キーワード：欺瞞性認知, 会話の公準, 情報操作理論

問 題

言葉を使って、われわれは様々なやりとりをしている。人間が言葉を使って行う特徴的な行為の一つに嘘をつくことが挙げられる。われわれは時に嘘をつき、時に嘘をつかれる。どのようにすれば嘘を見分けられるかは重要な問題であるが、その一方でわれわれはどのような言葉を嘘と捉えているのだろうか。

McCornack (1992) によると、会話の公準を破る発言内容は話を聞いている側の期待を裏切るため、発言者が嘘をついているのではないかという認知 (欺瞞性認知)^(註1) を引き起こすとされる。会話の公準とは会話を円滑に進めるために会話の参加者が守るべきル

ルのことである (グライス, 1998)。会話の公準には量の公準, 質の公準, 関係の公準, 様式の公準の4つがあるとされる^(註2)。量の公準とは、要求に対して適切な情報量で答えよというルールである。質の公準とは、自分が嘘だと思っている内容の発言や十分な証拠を欠いた発言をするなというルールである。関係の公準とは、関係のある発言をせよというルールである。様式の公準とは、曖昧な発言を避けよというルールである。

これらのルールにもとづき、どのような発言内容が欺瞞性認知を引き起こすのかについて、McCornack, Levine, Solowczuk, Torres, & Campbell (1992) および村井 (1998) が検討している。いずれも文章で場

1) 本論文は、久留米大学大学院心理学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。また、本研究の一部は九州心理学会第70回大会にて発表された。

2) 久留米大学大学院心理学研究科

3) 久留米大学文学部心理学科

註1) McCornack (1992), McCornack et al. (1992) は Perceived deceptiveness という言葉を使っており、これは直訳すれば「知覚された欺瞞性」となるが本論文では村井 (1998) に倣い Perceive を「認知する」とした。

註2) グライス (1998) においては「maxim」が「格率」, 「manner」が「様態」と訳されているが、本論文では村井 (1998) に倣いそれぞれ「公準」, 「様式」とした。

面を呈示した後、その文章に続く発言として会話の公準を守っているものと破っているものを呈示し、どの程度欺瞞性を感じたか尺度を用いて調査をするという手法であった。

McCornack et al. (1992) の研究では公準を一つ破っている発言内容についてのみ検討が行われ、どの公準違反の発言も公準を守っている発言内容よりも欺瞞性の程度（欺瞞度）が高いという結果を得ている。ただし彼らが用いた場面は、もしも実際に実験参加者がその場面に居合わせたときに知ることのできないはずの情報（真の情報）を含んでいた。

これに対して村井（1998）は、真の情報を知っていることは通常あり得ず、欺瞞度が高いのは当然であるとして真の情報を隠した場面を用いて、質・量・様式の公準違反について検討を行っている。その際、質の公準には下位分類が考えられるとして質の公準を生起頻度・立証可能度の二つに分けた。また、McCornack et al. (1992) では単一の公準違反に関してのみの調査であったため、様式の公準と生起頻度違反、様式の公準と立証可能度違反の2項目を複数の公準違反として調査を行なっている。その結果、様式の公準・質の公準に違反する発言内容の欺瞞度は公準を違反していない発言内容よりも高かった。また、複数の公準に違反した発言内容と単一の公準に違反した発言内容の比較がなされたが、欺瞞度には差が見られなかった。

これらの研究から、少くとも質と様式の公準を違反する発言内容は概ね欺瞞性認知を惹き起こすことが示されているが、関係の公準違反については村井は触れておらず、再検討が必要であろう。エクマン（1992）は欺瞞行為の形態の一つとして「はぐらかし」を挙げている。これは話題をそれまでのものからそらし、知られたくないことに触れさせないようにすることを目的としたものである。話題をそらすにはそれまでの会話とは関係のないことを発言する必要があるため、関係の公準に違反する可能性がある。よって本研究では「はぐらかし」を関係の公準違反として扱い、その欺瞞性の程度を検討する。

4つの公準に関してグライス（1998）は会話の公準の中には、遵守義務が他の公準ほど厳しくないものもあると述べている。例として「過度に回りくどい言い方で自分の考えを述べる人は、偽だと思ふことを言う人と比べて、咎められる度合は小さいだろう」ということを挙げている。このことから、公準違反の種類によって欺瞞度が異なることが考えられるが、実際に公準違反の種類の違いは欺瞞度の違いとなって現れるの

だろうか。

複数の公準違反については追試が行われているが、やはり複数の公準に違反する発言内容の欺瞞度と単一の公準に違反する発言内容の欺瞞度に有意な差は見られていない（村井，2004）。今回関係の公準を検討に含めるに当たって、村井（1998）および村井（2004）で扱われた様式の公準と生起頻度違反、様式の公準と立証可能度違反の2項目以外の組み合わせでも検討を試みる。

以上をまとめると、本研究では以下の三つに焦点を当てる。

第一に、関係の公準が破られた場合に欺瞞性認知は起こるのか。

第二に、それぞれの公準違反ごとで欺瞞性認知の程度は異なるのか。

第三に、複数の公準違反に対する欺瞞性認知と、単一の公準違反に対する欺瞞性認知の程度は同一なのか異なるのか、また、違反する公準の組み合わせによって、同一数の公準違反でも欺瞞性認知の程度は異なるのか。

単一の公準に違反する文を系統的に組みあわせ、それぞれの公準違反が1つ含まれる文から全て含まれる文を作成し、検討することを目的とした。

方 法

調査参加者：認知心理学の講義の受講生 78 名

質問紙：質問紙は場面呈示部分と応答文部分、評定尺度部分の3つからなる。

場面呈示部分：村井（1998）で用いられた場面を参考に作成した以下の場面を用いた。

“現在大学生の A さん（女性）は同じサークルの B くん（男性）と3年間恋人として付き合っています。A さんにとって B くんは、話を聞いてくれる色々なところに連れていってくれる楽しい恋人です。ある晩、A さんは B くんのカートに電話をしますが、何度かけても留守番メッセージになってしまいます。次の日 A さんはもともと大学に行く予定はなかったのですが、友達から来るように頼まれて行くことになりました。そして学内で待合せ場所に行く途中、偶然 B くんに会いました。そこで A さんは「昨日の晩、何度も電話をしたんだけど…」と B くんに言いました。これに対して B くんは、”

応答文部分：大学院生 4 名に対して、呈示された場面で考えられる応答を自由記述してもらった。得られた回答の中から生起頻度・立証可能度・関係度・明確度

表1 使用された応答文

1	違反している公準 (×の箇所)			応答文
	立証	頻度	関係 様式	
1				「その時バイトしてて、出られなかったんだ」
2	×			「その時寝てたから気付かなくてさ、出られなかったんだ」
3		×		「その時ケータイが故障してて、出られなかったんだ」
4			×	「それより、今日のこの服どう思う？」
5			×	「その時ちょっと色々あってさ、出られなかったんだ」
6	×	×		「その時ケータイが故障してて、そのまま寝ちゃってさ」
7	×		×	「その時寝てたんだけど、それよりこの服の組合せどう思う？」
8	×		×	「その時本読んでたりとか寝てたりとかまあ色々してさ」
9		×	×	「その時ケータイが故障してさ、それより、この服どう？」
10		×	×	「まあ、その時ケータイが故障してたりしてさ」
11			×	「その時まあ色々あったりとかしてさ、それよりこの服どうかな？」
12	×	×	×	「その時ケータイが故障しててそのまま寝ちゃってさ、それよりこの服どう？」
13	×	×	×	「その時ケータイが故障してたりとか、まあそのそのまま寝てたりとかしてて」
14	×		×	「その時まあ寝てたりとかしてて、それよりこの服なんだけど、どうかな？」
15		×	×	「その時まあケータイが故障とか、ね。それよりこの服なんだけどさ、どうかな？」
16	×	×	×	「その時ケータイが故障中で、そのまま寝ちゃったりとかしてて。それよりこの服どう？」

についてそれぞれ低いものを同大学院生4名と合議の上選出した。その後、それらを組み合わせて複数の公準に違反する文を作成した(表1)。

評定尺度部分: McCornack et al. (1992) および村井(1998)を参考に欺瞞度を尋ねる尺度を作成し、7件法で尋ねた。項目には「不誠実な-誠実な」, 「不正直な-正直な」, 「うそっぽい-本当っぽい」, 「信用できない-信用できる」の4つの形容詞対を用いた。

結果と考察

図1に公準の違反数と欺瞞度の関係を示す。違反する公準数が多くなるにつれて欺瞞度も増加したが、3つ以上の公準違反からは欺瞞度は変化しなかった。公準の違反数を独立変数、欺瞞度を従属変数として1要因分散分析を行ったところ、2つ公準違反と4つ公準違反、および3つ公準違反と4つ公準違反の2組以外には全て1%水準で有意な差が見られた ($F(4,302) = 22.00, p < .01$, 図1)。

次に、それぞれの公準違反数にける欺瞞度を図2に示す。1つ公準違反では、様式の公準違反の欺瞞度が立証可能度違反よりも有意に高く、関係の公準違反の欺瞞度が立証可能度違反と生起頻度違反よりも高かった ($F(3,72) = 8.68, p < .01$, 図2)。2つ公準違反では、関係と様式違反が立証と頻度違反、立証と関係違反、立証と様式違反の3つよりも欺瞞度が有意に高く、

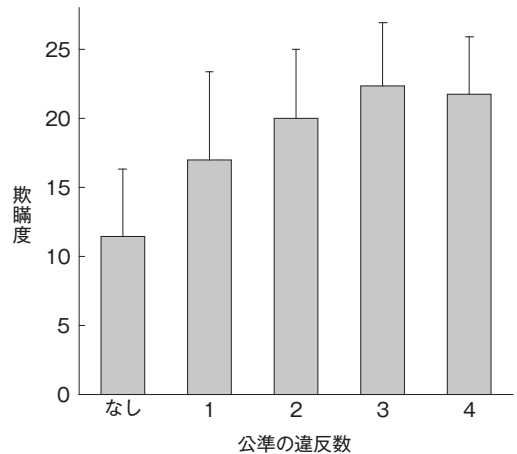


図1 公準違反数ごとの欺瞞度

頻度と関係違反が立証と関係違反よりも有意に欺瞞度が高かった ($F(5,110) = 6.23, p < .01$, 図3)。3つ公準違反では有意な差は見られなかった ($F(3,73) = 2.21, n.s.$, 図4)。

今回の実験では質の公準違反(生起頻度違反・立証可能性違反)での欺瞞度が様式・関係の公準違反での欺瞞度に比べて低かった。複数の公準違反のなかでの比較においても関係の公準違反と様式の公準違反を含む発言内容の欺瞞度が高かった。このことは、公準違

会話の公準違反と欺瞞性認知の程度

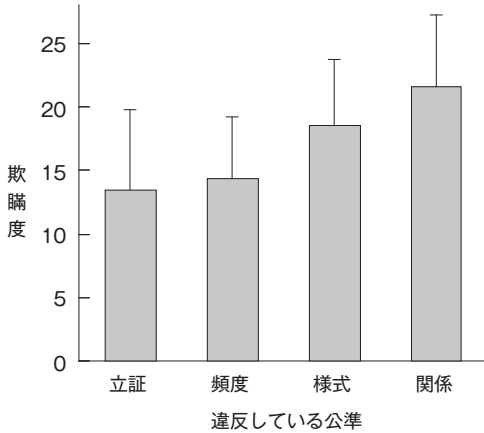


図2 1つ公準違反している発言内容の欺瞞度

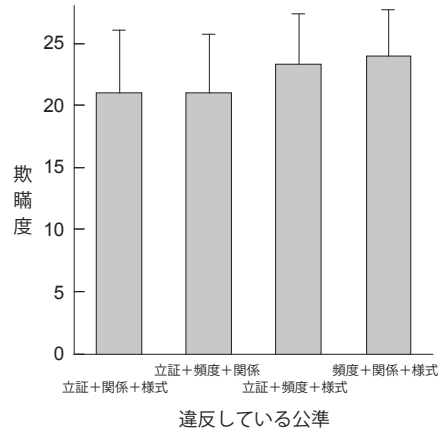


図4 3つ公準違反している発言内容の欺瞞度

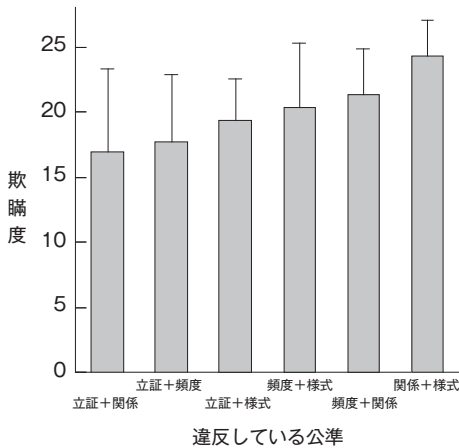


図3 2つ公準違反している発言内容の欺瞞度

反の種類によって欺瞞性認知の程度が異なることを示している。

また、複数の公準に違反した発言内容は単一の公準にのみ違反した発言内容よりも欺瞞度が高く、村井(1998, 2004)とは異なる結果である。村井(1998, 2004)の実験に際して使用された公準違反の組み合わせは、様式の公準違反と質の公準(生起頻度、立証可能性)違反のみであった。今回用いた応答文において、様式の公準違反に対応する部分は「まあ」「ちょっと」「色々」「～たりとか」などの含みを持たせる表現である。村井(1998, 2004)においても「ちょっと」「色々」「～たりとか」といった表現が用いられていることから、様式の公準違反による欺瞞度への影響は同様であろう

と考えられる。一方、質の公準違反に関しては、今回用いた応答文では立証可能性違反が「寝てた」、生起頻度違反が「ケータイが故障してた」という表現に当たり、村井(1998)においては生起頻度と立証可能性とともに違反するものとして「寝てた」という表現が用いられていた。このことから、「寝てた」という表現には立証可能性違反と生起頻度違反の両方が含まれていたと考えることができるが、今回の実験では単一の公準違反として用いられた「その時寝てたから気付かなくてさ、出られなかったんだ」(立証可能性違反)という発言内容と「その時ケータイが故障してて、出られなかったんだ」(生起頻度違反)という発言内容の間に有意な差はなかった。また、「その時本読んでたりとか寝てたりとかまあ色々しててさ」(立証可能性と様式の公準に違反)という発言内容と、「まあ、その時ケータイが故障してたりしててさ」(生起頻度と様式の公準に違反)という発言内容の欺瞞度の間には有意な差が見られなかった。このことから、複数の公準違反と単一の公準違反の間の差は今回用いた「寝てた」という表現と「ケータイが故障してた」という表現の違いからは説明できず、公準違反が複数組み合わせ合わせたことによる影響と説明できよう。

今回の研究の目的と照らすと、関係の公準違反をすると欺瞞性認知が起ること、質の公準に違反するよりも関係の公準及び様式の公準に違反する方が欺瞞性が高く認知され、公準違反の種類によって喚起される欺瞞性の程度が異なること、複数の公準に違反する発言内容は単一の公準に違反する発言内容よりも欺瞞性が高く認知されることが確認されたと考えられる。

今回は言語的な手掛かりに絞って調査・実験を行ったが、欺瞞性認知は非言語的な手掛かりによっても生起するはずである。非言語的部分に注目した欺瞞研究の一つに木藤・児玉(2003)がある。彼らは、真実の情報を述べている自己紹介と嘘の情報を述べている自己紹介の様子を撮影したビデオを実験参加者に見せ、映像の中の人物が述べていることが真偽どちらであると思うかと、その際に使った手掛かりを視線、顔の表情、身体動作、姿勢・態度、話すスピード、声の調子、言い間違え・言い直し、発話休止、その他のなかから複数回答を許して回答させた。結果、偽だと思った際に使用された非言語手掛かりは、割合の多い順に視線、顔の表情、発話休止、話すスピード、声の調子、姿勢・態度、言い間違え・言い直し、その他、身体動作であった。とりわけ視線と顔の表情は全ての手掛かりの使用度数の47%を占めていた。また、音声を消した条件で同様の実験を行っており、真偽判断に利用された手掛かりは多い順に顔の表情、視線、その他、姿勢・態度、発話休止、身体動作であった。実験参加者が能動的にこれらの手掛かりを使っていたのか、それとも受動的にこれらの手掛かりから欺瞞性を感じていたのかは定かではないが、非言語的な部分からの欺瞞性の認知には顔からの視覚的情報が大きく関係していそうである。また、言語部分と非言語部分がどのような関係を持ちながら欺瞞性の認知に影響しているのかはまだわかっておらず、今後の課題である。

本研究で用いられた場面は限定的であり、言葉の使いかたや二者間の関係、また設定とされた時間・空間の状況が異なればその言葉の持つ影響力や欺瞞性への

重みは異なってくるであろう。よって様々な場面および応答文を用いた検討が望まれる。

引用文献

- エクマン, P., 工藤力(編訳)(1992) 暴かれる嘘・虚偽を見破る対人学 誠信書房
(Ekman, P. (1985) *Telling lies : Clues to deceit in the market place, politics, and marriage*. New York: Norton)
- グライス, P., 清塚邦彦(訳)(1998) 論理と会話 勁草書房
(Grice, P. (1989) *Studies in the way of words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press)
- 木藤恒夫, 児玉千絵(2003) 嘘と本当を見分けられるか 久留米大学文学部心理学科・大学院心理学研究科紀要, **2**, 37-48.
- McCornack, S. A. (1992) Information manipulation theory. *Communication monographs*, **59**, 1-16.
- McCornack, S. A., Levine, T. R., Solowczuk, K. A., Torres, H. I., & Campbell, D. M. (1992) When the alteration of information is viewed as deception: an empirical test of information manipulation theory. *Communication monographs*, **59**, 17-29.
- 村井潤一郎(1998) 情報操作理論に基づく発言内容の欺瞞性の分析 心理学研究, **69**, 401-407.
- 村井潤一郎(2004) 発言内容の欺瞞性認知-公準の複数違反で欺瞞性は高まるか? パーソナリティ研究, **12**(2), pp. 116-117.

A violation of conversational maxims and degree of perceived deceptiveness.

TOSHIHIRO MORISAKI (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

TSUNEO KITO (*Department of Psychology, Kurume University*)

Abstract

Grice (1989) proposed four conversational maxims : 'quality', 'quantity', 'relation', and 'manner'. Messages that violate these conversational maxims cause the perception of deceptiveness. Murai (1998) investigated each maxim, comparing 1) messages violating one maxim with messages violating no maxim and 2) messages violating two maxims ('quality' and 'manner') with messages violating one maxim. In the present study, we examined the perception of deceptiveness caused by messages violating the maxim of 'relation', which were not examined by Murai (1998) and by messages violating two or more maxims. Participants were presented with a text describing a situation, followed by a response (i.e., stimulus) sentence. Participants rated the deceptiveness of the response sentence on a 7-point scale. Results showed that higher degrees of deceptiveness was perceived with messages violating the maxim of 'relation' than with messages violating the maxims of 'quality' and messages violating no maxim. Furthermore, a higher degree of deceptiveness was perceived with messages violating two or more maxims than with messages violating only one maxim.

Key words : perception of deceptiveness, conversational maxims, information manipulation theory